

序論)

みなさんは自分の信仰に自信があるでしょうか？

私は、私は自分の信仰にそれほど自信がありません。牧師なのにこんな事を言うのはおかしいと思われるかもしれませんが、私は自分の愛の足りなさを知っていますし、【主】に従う行動力のなさ、自分の罪深さを知っています。テモテへの手紙でパウロ先生は、自分のことを「罪人のかしら」(1:15)だと言っていますが、パウロ先生が罪人のかしらだとしたら、私は罪人の王様と言えるかもしれません。

それにも関わらず、【主】は私を滅ぼさず、キリストによって救い、牧師としてお立てになりました。なぜでしょうか。それは【主】の栄光のゆえです。

今日は本来、滅ぼされて当然の者が滅ぼされず救われる理由について聖書から教えられていきたいと思います。

文脈)

今日のイザヤ書の預言は大きな文脈としては、イスラエルをバビロン捕囚から解放することを預言する話の流れの中にありますが、今日の箇所はイスラエルの罪を指摘している箇所となっています。

1) 形式的な礼拝者イスラエル

まず【主】が指摘しているイスラエルの罪は、イスラエルが形式的な信仰者であったことです。1節と2節を読んでみましょう。

48:1 これを聞け、ヤコブの家よ。あなたはイスラエルの名で呼ばれ、ユダの源から出て、【主】の御名によって誓い、イスラエルの神を呼び求めるが、真実をもってせず、また正義をもってしない。

48:2 実に彼らは聖なる都の出だと自称し、その名が万軍の【主】であるイスラエルの神に寄りかかっている。

【主】はイスラエルのことを最初に「ヤコブの家」と呼んでおられます。ヤコブとは「かかとを掴む者」とか「裏切る者」という意味があり、イスラエルの性質を指しています。神様はヤコブにイスラエルという特別な名前をお与えになり、彼の子孫であるイスラエル民族は神様の選びの民になりました。また、そのイスラエルの王の部族であるユダには【主】に「感謝する」とか「賛美する」という意味があ

ります。イスラエルは、【主】に選ばれ、【主】に感謝し、【主】に心からの賛美をする民族であるべきでした。しかし、彼らは【主】を裏切って偶像礼拝をしていたのです。それは彼らがバビロンに連れて行かれた後も同じでした。しかも、彼らは偶像礼拝をして【主】を裏切っていたにもかかわらず、自分たちは聖なる都エルサレムの出身だといい、自分たちこそ万軍の【主】の民であり、神に選ばれた民であると誇っていたのです。【主】はこのイスラエルの姿を「【主】の御名によって誓い、イスラエルの神を呼び求めるが、真実をもってせず、また正義をもってしない」とか、「イスラエルの神に寄りかかっている」といわれています。

本来、【主】に寄りかかること、つまり、【主】に信頼して身を委ねることは素晴らしいことであり、【主】ご自身がご自分の民に求めておられることです。でも、イスラエルの【主】への礼拝は形式的なものであり、【主】に従う誠実な信仰や、神様のみ心を実行する義が伴っていないものだったのです。

神様は、ダビデを選ぶ時にサムエルを通して「人はうわべを見るが、【主】は心を見る」（Iサム 16:7）と言われた通りのお方です。【主】は心を見られるのです。だから、私達に求められているのは形式的な信仰や表面的な礼拝ではなく、心と従順が伴った真実な信仰であり、礼拝なのです。

先週、日高バイブルキャンプがありました。以前、同じようなバイブルキャンプに参加していた一人のキャンパーに「教会は楽しい？」と聞きました。するとその子は「楽しくない」と応えてくれました。「なんで楽しくないの？」って聞くと「本当の賛美がないから、大きな声で賛美することもないし、心を込めて本当の賛美をしていないから」と応えてくれました。私は、実際にその子の教会がどのような礼拝をし、どのような賛美を捧げているのかを知りません。でも、そのような子供でさえ心から賛美をしているかどうかを気にするのです。そうであるのならば、私達の礼拝を受け取る【主】なる神様が、私達の心の状態を見ておられないはずがないのです。

みなさん、みなさんは心から【主】を礼拝しておられるでしょうか。また、心から【主】を信頼して、【主】により頼んでおられるでしょうか。【主】は私達の信仰や礼拝の中身を見ておられるお方です。

2) 【主】を認めない頑なな者 -預言と成就がなされた理由-

次に【主】が指摘しておられるイスラエルの罪は、彼らの心の頑なさです。3-4節を順に読んでいきましょう。

48:3 「かつて起こったことは、前からわたしが告げていた。それらはわたしの口から出て、わたしはそれらを聞かせた。にわかには、わたしは行い、それは成就した。

神様はここで「かつて起こったこと」を【主】が先に預言してイスラエルに聞かせており、【主】はその預言の通りにことを行い、その預言を成就した。とされています。ここでいう「かつて起こったこと」というのが具体的に何を指すのかは明確にされていませんが、出エジプトの出来事や、北イスラエルの滅亡、さらにはバビロン捕囚の出来事など、イスラエルがたどってきた一連の出来事を指していると理解してよいと思います。【主】は出エジプトやバビロン捕囚など、イスラエルが経験する出来事をあらかじめ預言し、それをことごとく成就してこられました。なぜでしょうか？4節と5節を読みましょう。

48:4 あなたが頑なであり、首筋は鉄の腱、額は青銅だと知っているのに、

48:5 わたしは、かねてからあなたに告げ、まだ起こらないうちに聞かせたのだ。

『私の偶像がこれをした』とか『私の彫像や鑄た像がこれを命じた』とかあなたが言わないようにするためだ。

首筋は鉄の腱、額は青銅っていうのは、イスラエルの頑固さを示す表現ですね。イスラエルがまるで金属のように心を頑なにしていました。そして、その頑なさが具体的にはどのように現れていたかと言うと、彼らが経験した出来事を『私の偶像がこれをした』とか、『私の彫像や鑄た像がこれを命じた』とか言って、本来、神様がしてくださったことなのに、偶像に栄光を帰すようなことをしていたのです。

実際、イスラエルが出エジプトをし、モーセがシナイ山に登って、律法を神様から受け取っていた時、そのモーセを待ち切れないイスラエルは何をしましたか？金の子牛を作って、『これがあなたがたをエジプトから連れ出した神だ』と行って、偶像を拝みだしました。

人は、神様に栄光をお帰しするのではなく、偶像やこの世のものに栄光を帰すという心の頑なさをもっているのです。別の言い方をすると、神様の御業を神様のものとして認めることができない。そのような頑なさを持っています。

実際、私達だって神様の恵みの中で生かされているのに、神様の御業を認めず、【主】に感謝することなく日々、歩んでいることがあるのではないのでしょうか。例

えば、今の仕事をする事ができていることや、毎日の食事や、日々の生活をする事ができていること、そして、大切な人との出会いなどを神様の御業として感謝して賛美する日々を私達は送っているのでしょうか。

私達、人間は神様の御業を認めることができないという。頑なさを持っています。だからこそ、【主】はイスラエルが経験する出来事をあらかじめ預言され、それをことごとく成就して、この世の力や偶像ではなく、主ご自身がそれを成した事がわかるようにされているのです。

3) 背く者 -新しい創造(救い)を知らせる理由-

さらに【主】が指摘されているイスラエルの状態は、彼らが「背く者」だったということです。6節を読みましょう。

48:6 あなたは聞いた。さあ、これらすべてを見よ。あなたがたは告げ知らせないのか。わたしは今から、新しいことを、あなたの知らない秘め事をあなたに聞かせる。

【主】はここで、「イスラエルに新しいことを聞かせる。」と言われていています。ここでいう「新しいこと」とは短期的にはバビロンからの解放のことであり、長期的には、【主】イエスキリストによる人類を罪の罪過から解放することを指しています。

神様は、イザヤ書をはじめ、多くの箇所ではメシア預言をされ、キリストの贖いによって私達の罪を赦し、私達を救い出すことを預言されました。しかし、それは人の理解を超えた出来事であり、まさに「秘め事」だったのです。

じゃあ、なんで神様はそのような人の理解を超えた救いの出来事を預言されているかという7節

48:7 それは今、創造された。ずっと前からではない。今日まで、あなたはこれを聞いたこともない。『ああ、私は知っていた』とあなたが言わないようにするためだ。

なぜ、【主】はイスラエルがはじめて聞くような救いの御業を語られるのですか？ それは彼らが『ああ、私は知っていた』と言わないようにするためです。

みなさん、人が神様に対して行う最大限の背きって何かわかりますか？ それは

神様の栄光を自分のものにしようとする事です。神様が私達を愛して救ってくださっているのに、まるで自分で自分を救ったかのようにいう。そうやって神様の栄光を自分の栄光にしてしまう。そのような弱さを人は持っています。

イスラエルはそんな私達の代表です。だから、【主】は8節のように言われます。

48:8 あなたは聞いたこともなく、知っていたこともない。ずっと前から、あなたの耳は開かれていなかった。わたしは、あなたが必ず裏切ることを、母の胎内にいるときから背く者と呼ばれていたことを知っていたからだ。

みなさん、ご存知のようにイスラエルの父祖ヤコブは、お母さんのお腹の中にいるうちから、かかとを掴む者であり、裏切り者でした。神様はそれを知っておられたからこそ、人には創造もつかないような救いの御業をなされたのです。

一体誰が、ファラオに殺されるはずだったイスラエル人の赤子がエジプトの王宮で育てられ、やがてイスラエルをエジプトから連れ出すようになることを予想できたでしょうか。一体誰が、異国の王であるキュロス王がイスラエルをバビロンから解放することを予想できたでしょうか。一体誰が、処女マリアからキリストが生まれ、そのキリストが十字架で殺されることによって、人々の贖いが完成することを予想できたでしょうか。誰も予想できません。

でも、【主】はそのような人の理解の超えた救いの御業をされるのです。なぜですか？ 人が誇るのではなく、【主】のみに栄光が帰るためです。

神様は、私達、人間が神様の栄光を自分の栄光にしようとしてしまう。そのような背きの罪を持つことを知っておられます。だからこそ、【主】は私達の思いを超えた救いの御業をなさるのです。【主】の救いは、決して私達、人間の行いによって実現することはありません。エペソ人への手紙2章8節、9節に書いてある通りです。

エペソ人への手紙

2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

2:9 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。

4) 【主】の栄光のゆえに

だから、このイザヤ書でも 11 節のように言われています。

48:11 わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行う。どうしてわたしの名が汚されてよかろうか。わたしの栄光を、ほかの者に与えはしない。

【主】はご自身の栄光のために、人々の救いという、最も【主】の栄光が現れる御業をなさるのです。そして、そのために【主】は怒りを遅らせることと、私達を練ることをされます。9 節、10 節を読みましょう。

48:9 わたしの名のために怒りを遅らせ、わたしの榮譽のためにそれを抑えて、わたしはあなたを絶ち滅ぼさなかった。

48:10 見よ。わたしはあなたを錬ったが、銀のようにではない。わたしは苦しみの炉であなたを試した。

みなさん、【主】はなぜ、私達を滅ぼさず、そればかりか、私達に苦しみを与えて、私達を練ろうとされるのでしょうか。それは私達を通して【主】の栄光を現すためです。

イスラエルが経験したバビロン捕囚はその一環でした。だから、彼らがキュロス王によって解放され、エルサレムに戻ってきたとき、彼らは徹底的に偶像礼拝や混血を嫌うようになりました。【主】はご自身の栄光を現すために、神の民を救い、神の民に試練を課されるのです。

結論) 【主】の栄光を現す者となろう

私達もイスラエルと同じように形式的な礼拝を捧げたり、形だけの信仰生活をしたりすることがあります。また、彼らと同じように神様のみ業を認めようとしない頑なさ、【主】への感謝と賛美をしない頑固さがあります。さらには、イスラエルと同じようにいつのまにか【主】の栄光を自分の栄光に変えようとしてしまう弱さがあります。

【主】はそれでも、私達を滅ぼすことなく、キリストによって救い出し、そして、私達に試練を与えて、私達を練り、神様の栄光を現す器に変えてくださるのです。

そして、そのために私達には聖霊様という助け主が与えられています。コリント人への手紙 第二 3章 17節、18節を読みましょう。

3:17 主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。

3:18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

【主】の恵みによって救われた私達には自由があります。そして、私達はその自由を用いて、【主】の栄光を現す器へと聖霊様の助けによって変えられていくのです。

ですから、みなさん、まずは私達の行いではなく、恵みによって救ってくださった【主】に心からの感謝を捧げ、霊とまことによる礼拝を捧げる者となりましょう。マンネリ化した礼拝、形だけの礼拝ではなく、賛美の歌詞を心からの信仰告白として歌い、御言葉に実際的かつ具体的に従う者となりましょう。

そして、日々の歩みのあらゆるところにある【主】の御業を認め、いつも【主】に栄光をお帰しする者となっていきましょう。

【主】はそのために、時に試練を与えて私達を整えてくださいます。その試練にも感謝して、【主】に従うことで【主】に栄光をお返ししましょう。